

2022年4月27日 Vol.196

成長しない国と企業への冷徹な市場評価

株式相場はゴールデンウィーク入りを前に調整の動き。こうした展開は毎年のことと言えますが、今年はコロナ禍が中国で再び拡大し始めていることに加えウクライナ問題が長期化している点、更にはこうした要因に加え国力の低下を意味する円安が進んでいることから原材料高、食糧高などでインフレも進行している中でもあり、相場への不透明感が強くなり株価の下落で割安感が出ていても積極的な投資意欲につながっていないようです。

4月4日から始まった東証市場改革による3市場は時価総額の大きな流動性の高い1838の銘柄で構成されているプライム市場こそ直近の好業績銘柄を中心に比較的底堅く推移したのですがここに来て大きく調整の動き。スタート時に700兆円ほどあった時価総額は670兆円と30兆円の減少となってきました。1463の銘柄が上場するスタンダード市場や465の銘柄が上場するグロース市場は合わせても時価総額は27兆円しかないので影が薄れてしまったようです。株式相場の調整は時価総額の低下をもたらし、ひいては日本の国力の衰退をもたらす由々しき事態と言えます。今回の東証市場改革は外国人投資家の投資を促すためのものであるとされていましたが、今のところは盛り上がり欠ける展開です。

こうした市場環境の中で今年のIPO銘柄にも初値割れ、公開価格割れが相次ぐなど全体相場の調整ムードにより短期投資家の見切り売りが継続しているように思われます。上場承認が1社あり4月のIPO銘柄は9銘柄。年初からの累計では24銘柄（グロース16、スタンダード6、プライム1、その他1）となり昨年31銘柄から7銘柄の減少です。

成長性が高いと見られる銘柄は高PERで評価され30倍から50倍、時には100倍以上で評価される一方でIPO後の成長が見込めないとすればPERは10倍以下でクールに評価される事例も見出せます。今年のIPO銘柄ではスタンダードで上場したセイファート（9213）やノバック（5079）などが該当します。このほかグロース銘柄でもエフビー一介護サービス（9220）が低PERでの評価となっています。市場の低評価がIR不足に起因しているのであれば、これらの企業はより積極的なIRによって認知度向上を図る必要があります。IPO後に株価低迷が見られる多くの企業にとっては市場環境が悪化する中で投資家に何らかの格好でアピールしていく姿勢が求められます。過去3年程度の期間で上場を果たした企業の多くは右肩下がりとなっている株価の低迷に対して手をこまねいて見ている状況なのかも知れませんが、成長に向けたアピールによって投資家を味方につけて、時価総額を事業成長とともに高める努力が重要。プライム市場銘柄となった企業も油断禁物。スタンダードの企業はプライム市場目指して成長してほしいと願うばかりです。

市場環境の悪化する中で本日はストレージ王（2997）とモイ（5031）の2銘柄が新規上場。いずれも公開価格を上回っての取引開始。明日はペットゴー（7140）とクリアル（2998）の上場が予定されていますが、皆様の評価は果たしてポジティブなものとなるでしょうか。

（東京IPOコラムニスト 松尾範久）